

古川柳研究会会報

一四七号

平成二十年六月

川柳評万句合明和四年輪講

平成二十年四月十二日

礎講 阿見玲子

40 ▲ 平家方いつくしまるゝ内ばかり

(平家方いつくしまるる内ばかり)

慈しむゝ可愛がる。

厳島神社は平家一門の氏神とされる。その厳島神社に慈しまれている間は、平家方も「繁昌なこと」(前句)というのである。「厳島」と「慈しむ」の掛詞が技巧。おこるのをねめゝ守るいつくしま 拾四3

明四松1続き

39 ▲ 名代のたらめ所で縄をとき 五8

(名代の足らぬ所で縄を解き)

一人の遊女に多くの客がかち合つてしまい、名代に出す新造が足りなくなつてしまった。そこで仕方なく、折檻で縛つていた新造の縄を解いて、名代に出すことにした。

身にしみよやさとお針ハ縄をとき 九38

42 ▲ 耳こすりあんにたかわずもらひに出 拾八10

(耳擦り案に違わず貰ひに出)

耳擦りゝ耳打ち。(江)

貰うゝ遊里語。すでに他客に揚げられている芸娼妓をその時間中に所望する。(江)

吉原で遊女を揚げていると、若い者などがやって来て相方の遊女にひそひそと耳打ちをする。さてはと思つていると、案の定貰ひ引きの申し出があつた。

何かさゝやくとはたしてもらひに出 明五義5

43 そろばんをねかして来々と床でいゝ

(算盤を寝かして来たと床で言い)

礎講は、吉原の遊客が「家の経済の事は忘れて遊びに来たよ」と遊女に床の中で話している様子とした。

席上では、客を寝かしつけた上で、そつと抜け出していわゆる横に行った遊女の句とし、間夫の床の中で「銭勘定の客の方はうまく寝かしつけて来たから」などと言つている様子ということに。

そろばんを寐カす時分ハさんもたけ 明七仁1

44 ○ 御しんぶハはちはらひだと忒両出し 五8

(御親父は蜂払いだと忒両出し) 拾九31

41 ○ 血眼に成て禿をふりはなし 拾七2

(血眼に成つて禿を振り離し)

吉原で不義理をした客を、禿が大門あたりで待ち伏せて捕まえるという類句多数の一。逃げるのに「血眼に成つて」という表現が落ち着かないが、禿が客の袖にしがみつくのを必死に振り離す光景であろう。

しねばつてはなしハせぬと禿いひ 八8

蜂払いゝ人の言を聞き入れず、一方的に言いしりぞけること。(江)

礎講は、どら息子の作つた借金を取り立てに来た人に対し、父親が二両払つて「もうこれ以上は払わないぞ」と拒否している様子とした。

主題句は『柳多留』に採られ、『教養文庫』では「銚子へやる最後の捨て銭だ」と言いながら、父親がどら息子に二両与える様子とされている。席上でこの二説が議論となつたが、結局礎説通りということに。

近所にハ居るなと母は忒両かし 五7

45 ▲ さかなやへ鯛をあづける御出ッ頭

(魚屋へ鯛を預ける御出頭)

出頭ゝ君側にあつて政務にあずかる者となること。旗本などが出世して、お祝いの鯛がたくさん届けられるので、家で処理しきれずに出入りの魚屋へ預けるというのだろう。

席上では、実際に届けられた鯛を魚屋へ預けるようなことがあつたかどうか疑問とする意見があつたが、いずれにしても次々と鯛が届けられることを大げさに表現した句と思われる。

目の下ッに帆をかけて来々御立身 四九12

46 ▲ はいつけたまんまてはたく神樂堂

(はいつけたまんまて叩く神樂堂)

礎講は、「はいつける」を「くつつける」の意とし、男共が神樂堂にへばりついて見ている上で、神樂神子が御幣を叩くように振っている様子とした。

席上では、吸いかけで灰を付けたままの煙管を叩いて、神樂神子が出て行く光景との意見などあったが、結局不明句ということに。

47 ▲ 水茶やを二けんふさいて見ッ見せつ 五 8

(水茶屋を二軒塞いで見ッ見せつ) 明六宮 1

水茶屋での見合いを詠んだ類句多数の一。隣り合った二軒の水茶屋を借り切つて、お互いに見たり見せたりするのである。

そらつ茶をのみく見たりみられたり 一二 17

48 × しんめうのなかしへかゝる人すくな 五 8

(針妙の流しへ掛かる人少な)

針妙Ⅱ寺または町家に雇われて裁縫する女。(江)針妙が、雇われた家の人手不足のために、流し元に立つて勝手仕事をしている。前句「ほめられにけり」も勘案すると、本来下女のする仕事だが、人手不足を見かね

席上では、この供部屋は武家か吉原か議論になったが、結論出ず。

51 × ひぢつ切ッまくつて姫ハ茄子をつけ

(肘っ切り捲つて嫁は茄子を漬け)

嫁が肘まで捲り上げて茄子を漬けている。恥ずかしがりの嫁にしては、肌を露わにして糠味噌などを扱うのは、健気だということだろう。

姫のいじ片肌ぬいて茄子をつけ 五六 35

52 生酔のまくらあてかい次第なり 五 8

(生酔の枕宛がい次第なり)

正体無く寝ている酔っぱらいに枕を宛がってやると、宛がわれたままの姿勢で寝ている。

しばられたまゝなまゑひハ寐入ル也 安元松 5

53 × せんへいてやつとまくらゑ取ッかへし

(煎餅でやつと枕絵取り返し)

親が持っていた枕絵を、何かの拍子に子供が見つけ出して見ているというような場面であろう。大慌でで煎餅でだまして何とか取り返す。

まんちうで枕草紙を取返し 苔翁宝一三興 1

て好意的に手伝っているということか。

針妙も中ゆびねじるきうな客 四〇 25

49 ▲ 風花をふとんでふせぐおもしろさ

(風花を蒲団で防ぐ面白さ)

風花Ⅱ風といつしよに舞い散る小雪または霰。風上の雪地から吹き送られて舞い散る場合もある。(江)窓から舞い込む風花を蒲団で防ぐのであるが、それが「面白い」というのは吉原の居続けのことだろう。どら息子が、登楼した翌朝、風花が舞つていよいよ雪になりそうな天候にこれ幸いとばかり「居続けだ、居続けだ」と言いながら蒲団に潜り込む光景。

風花の内ハ居つゝけにへきらす 明四梅 3

50 × 供部やの外から乳母ハちゝてよび 五 8

(供部屋の外から乳母は乳で呼び)

供部屋Ⅱ供の者が控えさせられる部屋。(目)乳母が、預かっている子供が供部屋に入り込んでしまったので、何とか呼び出そうと「お乳をあげますよ」などと外から声を掛けている様子。供部屋には柄の悪い連中がいることが多いので、乳母は中に入りたくないのがある。

54 ○ 藪入ッハ弟をまくにほねを折り

(藪入りは弟を撒くに骨を折り)

藪入りで実家に帰ってきた子、遊びに出かけたのが弟が付いて回るので、何とか撒いてしまおうと骨を折っている。

藪入の妹はつきについて居る 五 2

55 × しんそばのきうじらう下てつき当り 五 8

(新蕎麦の給仕廊下で突き当たり)

新蕎麦の蕎麦振る舞いの光景であろう。茹で立ての新蕎麦を途切れないようにお客に出すために、給仕が廊下で突き当たるほど慌ただし。

席上では、蕎麦屋の光景ではないかとの意見あり。

新そはハ物もいわぬに人かふへ 宝九礼 2

56 × わたほうし着ながらつかひたてました

(綿帽子着ながら使いたてました)

娘が嫁入りで実家を出発するときの光景であろう。綿帽子を被りながら、下女に対して「これまでずいぶん使いたてましたが、よくしてくれました」などと挨拶をしている様子。

遣ひたてましたと下女へいとまこひ 明二礼 4

57 × 旅立ハはでながはやくくたひれる 五8

(旅立ちは派手なが早く草臥れる) 拾二2

旅に出發する際、派手な恰好ではしやいで出かける奴が、早々に草臥れてしまう。旅慣れている人は、そんなことはしないのである。

あのげん気よふ戸塚迄行こふぞい 一〇11

58 せんこうのまん中頃て帯をとき

(線香の真ん中頃で帯を解き)

花街での遊興の様子。遊興時間を計る線香が真ん中辺まで燃えたあたりで、相方がようよう帯を解く。線香が燃え尽きる頃に中途半端な状態にしておいて、もう一本線香を付けさせようという作戦なのである。

線香をつぎ／＼とぼすおもしろさ 六九25

松2

1 ○ あどけ無やうて無心にぬけ目なし 五8 拾七2

(あどけないようで無心に抜け目なし)

まだ若い遊女を詠んだ句。あどけない顔をしているが、そこは遊里で鍛えられているから、客への無心には抜け目がない。

5 × ちやせんかミそらしてゑハ舌を出し

(茶筌髪そらして嫁は舌を出し)

茶筌髪Ⅱ頂で束ねた髪を茶筌の形にしたもの。女子のは未亡人または少女の髪型。(日)

礎講は、嫁が、亭主に先立たれて茶筌髪にしている姑の言うことを適当に聞き流して(逸らして)、陰では舌を出している様子とした。

席上では、姑が茶筌髪にしているのを、更に丸坊主にさせて(剃らして)舌を出している様子との意見があったが、ひとまず礎講通りということに。

6 ゑい山ハごま木いせにハ鈴の音^ナ

(叡山は護摩木伊勢には鈴の音)

比叡山では護摩木を焚き、伊勢神宮では鈴を鳴らしてお祈りをするという対比を詠んだだけの句のようである。

神棚は伊勢仏壇ハ比叡山 一四二12

7 × 一盛^ト六十余州後家さはい 拾五14

(一盛り六十余州後家差配)

一盛りⅡしばらく盛んなこと。ひとしきり。(日)
ひとしきり六十余州(日本)を差配した後家と言えは誰のことという謎句。答えは尼將軍と言われた北条政子。

席上では、新造の句とすべきとの意見あり。

あどけない顔でつき出し無心いひ 柳樽七13

2 × おやゆつりたと盃をしやふらせる 五9 拾初37

(親譲りだと盃をしやぶらせる)

赤ん坊に盃をしやぶらせて、「おや、これは親譲りで酒飲みになるぞ」などと笑っている光景。

はつ雛のあるし盃しやぶつてる 五一36

3 ○ おしかなひそのの娘無言なり 五9

(惜しいかな秘蔵の娘無言なり)

秘蔵Ⅱ大切にすること。可愛がること。(江)
大切に育てられた箱入り娘ではあるが、惜しいことに口が不自由だという意味のようである。

4 × あきの守時分ハしくしんしやなり 五9

(安芸守時分は至極信者なり) 拾五24

平清盛は、安芸守に任ぜられたとき、厳島神社の大規模な修復を行うなど、信仰篤かった。後年の横暴振りと比較すると、安芸守の時分はまだ厳島神社の敬虔な信者であったとの意。

いつくしま今ぞうゑいもあきの守 安九鶴1

ほそひ手で尼將軍ハ世をにきり 拾五16

8 × 心中のあすから遣^リ手氣かちがい

(心中の明日から遣り手氣が違い)

礎講は、遣り手に恨みを持った遊女が心中をし、その怨念のために翌日から遣り手の氣が違ってしまったという意とした。

席上では、遊女の心中について監督責任を問われた遣り手が、翌日から氣が違ったように厳しく遊女を管理するようになったとの意ということに。

遣^リ手をハやりこめたばん心中 明五鶴2

9 ▲ 仏神の外にとう明^テ壺ツ上^テ 拾八10

(仏神の外に灯明壺つ上げ)

仏神の外にもう一つ灯明を上げて拝むものがあるという意で、吉原のいわゆる金精を詠んだ句のようである。金精は、金や木で男根の形を作り、主として娼家などで金精大明神として神棚に祭るもの。「大明神」ではあるが、民俗的な習俗ということで「仏神の外」と表現したのだろう。

仏神の外におかむわかさかり 宝九梅

10 ○ にせ首かして中宿迄さわき

(偽首が知れて中宿迄騒ぎ)

礎講は、脱廓の句とし、遊女が寝ているように見せかけておいて(偽首)逃亡したので、相手の客の中宿迄追ひ掛ける騒ぎになったという意とした。

席上では、

①奉公人が、寝ているように見せかけて店を抜け出し、遊里へ遊びに行くという類句多数の一で、それがばれて中宿迄追ひ掛けられた、

②①のような偽首遊興がばれて、以後吉原通いが出来なくなつたので、ふだん使っている中宿迄騒ぎになった、

③この中宿は奉公人の請け宿のことで、奉公人の偽首遊興の不始末で請け宿まで騒ぎになった、
などの意見が出されたが、ひとまず③ということに。

あぶれかごにせ首で出た奴ッをのせ 明五梅 1

